

2026
正月●冬号

175

特集

駒澤大学学長 村松哲文氏に聞く

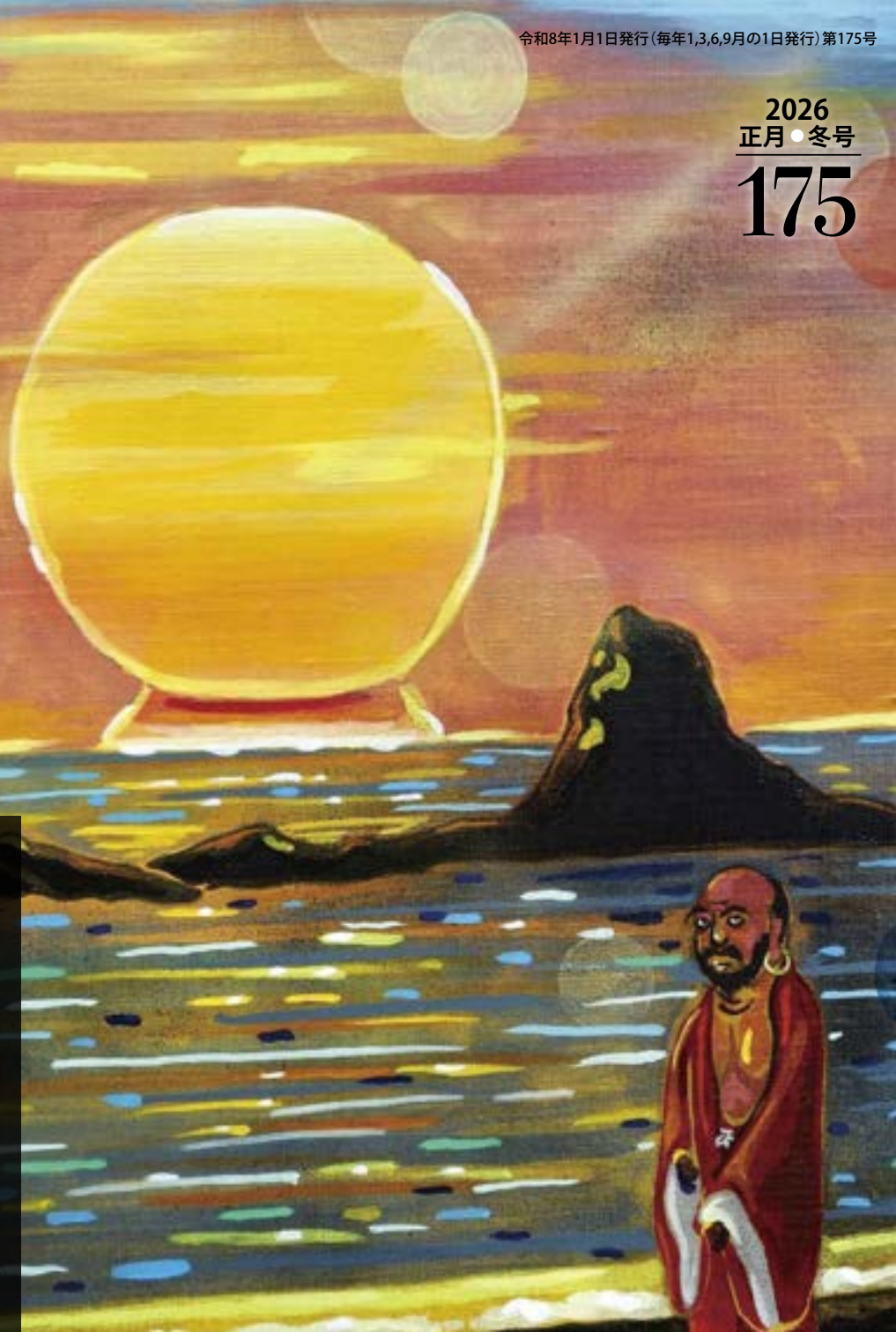
これからの仏教と大学

——波から降りず、変化し続ける

聞き手…古瀬正也

一仏兩祖の教えを今に伝える

曹洞禅
グラフ
SŌTŌZEN
Graph



新春をお迎えの皆さまに、ご清福を言祝ぎ
お慶びを申し上げます。

本年取り上げました言葉は知足です。釣り
竿を肩に小脇に大きな鯛を抱えて満面の笑みを
浮かべた恵比寿様「恵比寿顔」の言葉も頷けます。
そんな恵比寿様を見事に歌った道歌があります。

足ることを 知らばこそ我

福の神 二匹鯛釣る

恵比寿なければ

成る程、恵比寿様は一匹の鯛で大満足、満面の
笑みです。必要以上に求めない、足ることを知っ
ているからこそ心平らかに波立つことなく穏や
かに過ごせるのです。

翻って、世界情勢はどうでしょう。我が
国の世情は、何よりも「私」はどうでしょう。「己
に迷って物を逐う」の禅語が喝破するが如く、
自己を見出せぬ不安から飽くなき欲に振り回さ
れてはいないでしょうか。

お釈迦様が覚られた縁起の世界は、調和と
和合の世界です。その調和を崩すのが、人間の
欲望です。

物を逐うことを止め、正身端坐し出息・入息、
一息一息に心を致してみましょう。心平らかで
満たされた知足の世界に出合う事でしょう。

至禱至禱



曹洞宗管長
大本山永平寺 貫首
南澤道人



知足・心自平



人々悉く道器なり



大本山總持寺 貫首
石附周行

人々悉く道器なり

新年明けましておめでとうございます。令和
八年の新春を、参詣いただいた大勢のみなさまと
共々に迎えることが出来ました。

大本山總持寺を開かれた瑩山禪師さまは
『伝光録』の中で「人々悉く道器なり。日日是好
日なり」とお示しであります。「身心を仏道と
無縁のままに放置するようであってはならない。
お互いは皆、道川のものを本来豊かに具えてお
り、毎日が悉く恵まれた良い日である」とお示し
であります。

新年に当り、どなた様も意気天を突く思いを
めぐらされていることでしょう。瑩山禪師は、
生きとし生けるものの全てにさとり、素質がある
ことを示されたながら、日々の修行によってのみ
成し得るという、優しさと厳しさの両面が見え
る一言ではないかと思ひます。

どうぞ、お互いに精進を重ねて禪師のお示し
を参考にいい年を歩んでいただきたいと願ひ
たしております。輝かしい新年の歩みを進めて
まいりましょう。

令和八年
迎春

これからの仏教と大学

——波から降りず、変化し続ける

二〇二五年四月、駒澤大学の新学長に就任した村松哲文氏。

専門は仏教美術史、禅美術。就任時に掲げたのは

「縁起」「慈悲」「智慧」という三つの方針。

本インタビューでは、学長就任後の変化から、

「波から降りない」人生観まで、広く多様な視点で

「これからの仏教と大学」について

語っていただいた。



駒澤大学学長 村松哲文氏

対面で話すことの大切さ

——学長に就任されて、どんな変化がありましたか。

「まず、学生と接する機会がすごく減りました。マネジメントする立場に代わって、例えるなら、転職しちゃったような感じがありますね。でも、一方で、職員の声もちゃんと汲み取らなくてはいけないので、これを機に対話する場も設けています。この前は、新入職員との座談会を開いて、普段なかなか聞けない大学への夢などを話してもらいました。

僕は、やっぱり対面で話すことを大事にしているんです。コロナ禍からオンライン会議が続いていましたが、基本は全部対面に戻した。顔を見て喋らないと、自分の意が通じない。オンラインも便利なんですけど、背景にある意図や熱意、行間を読むことが難しく。対面なら、会議後の立ち話から、二次的・三次的な成果が生まれることも

ありますから。

普段の学内の仕事でも、電話で済ませることもあるんですけど、なるべく僕は直接対面で伝えることを大切にしています」

「地域に溶け込む」ことで「誰からも愛される大学」へ

——「縁起・慈悲・智慧」の三本柱、その中で「縁起」を加えた理由をお聞かせください。

「大学は、学生や教職員のためだけでなく、地域社会のためにもあると思うんですよね。だから、学生以外の人にもどんな大学に入ってきてもらって、学んでもらえる環境を作っていきたい。ですから『誰からも愛される大学・縁起』という言葉掲げました。

縁起とは『すべてはつながりの中で成り立っている』という考え方です。受験生や保護者だけではなく、地域の人たちにも愛される大学になっていくこと、それがこれからの大学には必要だと思います。

とにかく『地域社会に溶け込む』って

うことですね。例えば、夏に『駒沢ふれあい広場夏祭り』を開催すると、来場者は数千人規模になり、楽しんでもらえている。今年八月に国の登録有形文化財（建造物）になった『禅文化歴史博物館（登録名称：駒澤大学旧図書館）』にも気軽に足を運んでいただきたいですね。

このような『大学を外に開いていく活動』を通じて、最終的に『駒澤大学がこの地にあってよかったな』と思ってもらえるような大学を目指しています」

仏像鑑賞が育む 「真実を見る眼」

―ご専門の仏教美術史を通じて、学生に伝えたいことは何でしょうか。

「仏教美術史で重要なのは、真贋^{しんがん}を見極める、ということです。実は、仏像にも偽物って結構あるんですよ。例えば、仏像をよく観察すると、この腕の部分の色が違うなと気づくことがあります。そこから『後世

に作り直されたものだ』と分かったりする。だから『真実を見る眼』が大切です。

ちなみに、これは美術史だけの話ではなくて、世の中でも『何が真実なのか』を見極めなくてはいけない。現代ではフェイクニュースも多い。ですから、偽物と本物を見極める練習としても、美術史の視点は役に立ちます。

でも実際には、一体の仏像を見ると、ほんの数分しか見ない人が多いんですけどね（笑）それでその仏像が理解できるかと言ったら、多分でないですよ。一、二時間も見ていくと、そこらいろんなものが見えてきます。

人間も一緒にすよね。一回だけ会っても、なかなか分からなくて。二、三回と会っていくうち



◀ 左から 仏教企画代表・藤木氏、
学長・村松氏、インタビュアー・古瀬氏

に『ああ、こういう人だったのか』と分かってくる。そういう意味では、有名な仏像を一回見て満足！ ということではなくて、

何度も繰り返して見ることによって、いろいろなことがわかってきます。仏像を見る楽しみはつきないですね」

波から降りない ―ただ打ち込み続ける姿勢

―学生は悩みも多いかと思いますが、どのようなメッセージを伝えたいですか。

「悩みって絶対ありますよね。でも、その悩みを作っているのは、自分だってことに気づかなくてはいけない。仏教には『唯識^{ゆいしき}』という考え方があって、『心の持ちようで見え方が全く変わる』ということです。

例えば、電車に乗り遅れたとすると。だけど、乗り遅れたことによって、次に降りる駅で苦手な人に会わなくて済んだ。そういうことって、ありえますよね。だから、あなたにとって悪いことは起きないんです。良い

ことしか起きない。結局は、すべて心がつくり出している。

それから、人生において一番やってはいけないのは、波から降りることです。人生には高い波もあれば、低い波もあります。低い波のときも、絶対に波から降りてはいけません。やがて必ず高い波が来るんです。

言い方を変えれば、結果がすぐ出なくても、とにかく『ひたすらあることに打ち込む』ということです。この姿勢を、僕は『只管^{くわんたぎ}打坐^{だざ}』に重ねています。ひたすら坐り続ける修行のように、好きなことにただ打ち込み続ける。そうすると、その先で何かが見えてくるんですよ」

仏教を「外に」ひらく

―学長は、テレビやYouTube、公開講座などで仏教を広く発信されていますよね。

「大学時代の指導教授が『研究して終わるのではなくて、一般社会に還元しなくては

読者プレゼント

今回は村松哲文：監修『超図解・仏像大事典』（朝日新聞出版）を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画（下記宛先）まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえ、ハガキでご応募ください。

◎2026年2月末必着



173号（春号）読者プレゼント当選者

小林幸一郎：著『見えない壁だって、越えられるは次の方々が当選されました。

▶東京都 山崎恭子様 ▶神奈川県 石川泰子様 ▶長崎県 宮崎秀子様
▶神奈川県 出居 昇子様 ▶鳥取県 西川明子様

読者からのおたより

- 暑中お見舞い、申し上げます。毎日暑いですね。最近はい5月頃から暑くて、いつから夏が始まるのかわかりません。近所の家の竹の花が咲いています。竹の花は何百年に一度しか咲かないとか。初めて見ました。

東京都 山崎恭子様

- 8月を前に、お寺からの棚経や盂蘭盆会（うらぼんえ）施食会などの案内とともに、曹洞禅グラフが届きました。いつもパラパラとめくりながら興味あるページから読んでいます（お便りより抜粋）。

鳥取県 西川明子様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

プレゼント・お便り 宛先

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 仏教企画編集部
Eメールアドレス：fujiki@water.ocn.ne.jp



古瀬正也（ふるせ・まさや）
ワークショッブデザイナー。ファシリテーター。1988年生まれ。長野県御代田町在住。駒澤大学グローバルメディアスタディーズ学部卒業。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。2012年に古瀬ワークショッブデザイン事務所を開業。2020年から対話に生きる」を軸に活動中。現在、人と組織の探究メディア「CULTIBASE」にて『対話観を巡る旅』を連載中。

らき、大学を地域にひらこうとする村松学長。その言葉からは、仏教を特別な教えに閉じ込めるのではなく、日常の中で実践し、つながりを広げていく姿勢が伝わってくる。

波から降りない覚悟と、変化し続ける柔軟さ。その両輪が「これからの仏教と大学」を形づくっていくのかもしれない。



―最後に、「これからの仏教」についてのお考えを聞かせてください。

「仏教の歴史を辿ってみると、常に変化す

これからの仏教 ―変化し続ける力

―最後に、「これからの仏教」についてのお考えを聞かせてください。

いけないよ』と仰ったんですね。だから、なるべく多くの人にも分かりやすい言葉で、例えば話も含めて伝えていこうとしています。例えば、NHKの番組でアイドルの方と一緒に仏像を紹介したこともあります。おじさんと仏像だけだと、絵的にも綺麗じゃないから（笑）アイドルの方に出ていただき、少しでも裾野が広がったらいいなと。

るんですね。むしろ、変化してきたからこそ、残っているんです。インドと中国の仏教は全く違いますし、日本の仏教もどんどん形を変えています。

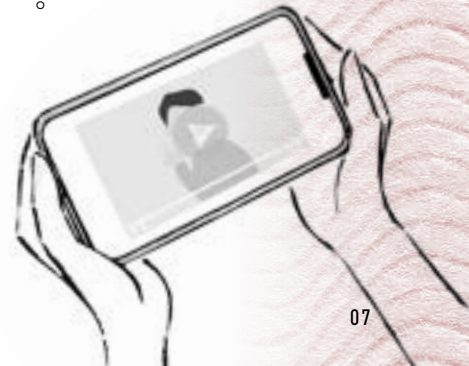
もちろん大切な部分は残さない

といけないのですが、『着せ替え人形』みたいな感じでしょうか。つまり、着ているものは、時代によって変わっていく。お釈迦様や教え自体は変わらないんですけど、時代に合ったものを着てるから、多くの人にも受け入れられますよね。

例えば、『若い人の言葉を使う』というのもひとつの手ですし、曹洞宗でも、最近YouTube動画をつくって配信しているんです。

今は変化の早い時代ですから、それに呼応するように、仏教も変化しながら試行錯誤しているところだと思います」

「縁起・慈悲・智慧」を軸に、仏教を一般にひ



妙音觀世音
梵音海潮音
勝彼世間音
是故須常念

妙音觀世音
梵音海潮音
勝彼世間音
是故須常念

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

觀世音の妙なる音声は

神聖な清らかな音声であり

大海原の潮のように遍く伝わる音声であり

世間のいかなる音声より勝れている

この故に常に觀世音を念じるべきである

訳…丸山却外

作品募集

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いて応募ください(無料)。

ご応募の中から優秀な作品を選び、年に一度誌上で発表し、記念品を贈呈します。

住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。

169(夏号)～172号(前々号)の審査発表は175号(今号)にて。

次回、173号(前号)～176号の審査発表は179号(冬号)にて行います。

宛先 〒252-0116

神奈川県相模原市緑区城山4-2-5

仏教企画『曹洞禅グラフ』毎日書道募集係宛

締切

2026年2月末日

(当日消印有効)

清水川峰子さん

ゆつたりとした字形、穏やかな
線質が魅力的な好作品です。

真觀清淨觀
廣大智慧觀
悲觀及慈觀
常願常瞻仰
清水川峰子

水谷隆さん

筆尖がしっかり立って、きりつとした
線・字形が素晴らしい作品です。

種種諸惡趣
地獄鬼畜生
生老病死苦
以漸悉令滅
水谷隆謹書

二〇二五年作品選評

今号では『曹洞禅グラフ』169号～172号の写経手本による多数の応募作品の中から、書きぶりの素敵な作品10点を
選び寸評を添えました。甲乙つけがたい作品揃いでしたが、優秀作品の図版掲載はお2人とさせていただきます。

青木文子さん	毎号どの書も整った字形・伸びのある線が美しく、 特別優秀作品です。	(169～172号)
東安夫さん	毎号どの作も力強く書され、字形・線質ともに特別優秀作品です。	(169～172号)
安田緋奈子さん	毎号幅び暢び大書され柔軟な線・字形。整った特別優秀作品です。	(169～172号)
大箸恵美子さん	基本的な筆使い(起筆・収め・払い)が力味なく素直な線で 素晴らしい作品です。	(169・170号)
阿部嘉子さん	穏やかな筆致で字形もしっかり丁寧に書かれて立派な作品です。	(169・170・171)
武田允さん	力強く重厚な線質で細部迄丁寧な運筆され、立派な作品です。	(170号)
黒澤喜久江さん	力味のない素直な線・起筆・収め、細部迄丁寧に運筆、 素晴らしい作品です。	(169号)
村上康治さん	筆が立って大変きれいな線・力強さ、リズム良く書け好作品です。	(172号)

募集俳句選

選Ⅱ尾崎竹詩

今鳴くなへびが耳をすましてる

埼玉県◎西岡備中

この句の面白いところは説明をしていないところです。作者が饒舌にならずに読者の想像の翼を自由に遊ばせてくれるところです。読者の想像力が乏しいときは何を言わんとしているのか分からないかも知れません。だから読者は自由に鑑賞していいのです。さて鳴くなと言われているのは何でしょう。蛙や鳴く虫でしょうか。はたまた雛や卵を狙われる小鳥や鶏でしょうか。緊張感溢れる一句となりました。

おさき・たけし

1947年 徳島県阿南市生まれ。
2016年 現代俳句協会理事。
2019〜24年まで 神奈川県現代俳句協会会長。

うぐいすとバス待ちするや中尊寺

三重県◎山本浩子

情景がはつきり見えてくるところがこの句の長所でしょう。中尊寺は陸奥の森の中に佇んでいる由緒ある名刹です。観光で訪れたものだと思いますが金色に輝く光堂を見た昂ぶりが冷めやらぬ間に帰りのバスを待っていたのでしょうか。視覚にも聴覚にも鮮やかに訴えてくるものがあります。

七夕のタンザクダンス平和を誘い

宮城県◎清水川峰子

仙台市在住の清水川さんにとっては仙台の七夕飾りの見事さに感嘆してきたのでしょう。今の願い事は世界平和なのかも知れません。風に揺れている短冊がダンスをしているように見えたのです。「タンザク」は短冊と漢字にした方が見やすいですね。

選者詠

電車からバスへ秋思が乗り換える

尾崎竹詩

年間大賞

『曹洞禅グラフ』に俳句募集欄ができて5年が経ちました。今年は169号から172号の中から年間大賞を決めることになりました。

年間大賞

宿院の朝の勤行百千鳥

じんぎようもちどり

千葉県◎戸田ユミヲ

最近はお光客にも宿坊を解放してくれる寺院が多くなってきました。早朝には勤行にも参加をさせていただくことも可能になりました。百千鳥は春を迎えた小鳥たちが恋の歌声を鳴き交わすことです。ちょうど百千鳥の囀りの最中と重なる時間帯で勤行を勤めることになるのです。早朝の勤行はなんとも心地よい時間なのですが、それを邪魔するはずの百千鳥の囀りは不謹慎かもしれませんが一般のお光客にとってはなんと素敵な雑念なのでしょう。百千鳥の囀りも勤行なのかも知れません。

年間優秀賞

がんばらない二人の暮し遠花火

静岡県◎亀澤淑子

高齢となったご夫婦の暮しでしょう。若かりし頃はきつと遮二無二頑張ってきたのに違いありません。それだけに現在の暮しが「がんばらない」暮らしと思えるのです。いや頑張つてはいけなさと心得ているのです。高齢者は頑張り過ぎると良くない結果になることを悟っているのです。ちょうど遠花火を見ているような心の余裕を感じました。

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております
(お一人3作品まで)

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

① はがき、封書で投稿

〒252-0116 相模原市緑区城山 4-2-5
仏教企画『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛

② Eメールで投稿

fujiki@water.ocn.ne.jp

締切

2026年2月末日(当日消印有効)

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表する予定です。
- 更に年に1回冬号(新年号)にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。

年間佳作

群青の海に向ひて銀杏立つ

いちよう

広島県◎小畑宜之

初電話淋しくないと嘘言つて

佐賀県◎池内淳子

夕闇に辛夷の白き道しるべ

東京都◎青山千代子

年間優秀賞

引き売りの声に手鍋や螢鳥賊

ほたるいか

神奈川県◎田中恵一

最近は大手スーパーが食料品全体を販売し、引き売りの行商を見かけることはめつたにありません。引き売りは野菜や魚類などに特化した商品だけを小規模に販売するのです。それは人と人の密接な信頼感も売買していたのかも知れません。情報交換を伴う個人的な繋がりがだんだん希薄になってきたのは残念な気がします。

教えて！『修証義』

道元禅師の道標

文・やなぎさわまどか 撮影・羽柴和也

現代社会の生きづらさを感じる
筆者に、枡野俊明老師が

『修証義』を説く本連載。

第一節では、容姿や社会的地位
などを『ものさし』に他者と
比較することなく、今ある
個々の生命を尊ぶことを教わった。
今回、第二節でも禅における
死生観について、
問いを重ねることから始めた。

写真：永平寺回廊

人身得ること難し
仏法値うこと希なり、
今我等宿善の助くるに
依りて、已に受け難き
人身を受けたるのみに
非ず、遭い難き仏法に
値い奉れり、
生死の中の善生、
最勝の生なるべし
最勝の善身を徒にして
露命を無常の風に
任すること勿れ。

修証義第二節

人間であることの稀さ。生まれ
変わりを決める先祖からの業とは

「私たちの生命は、預かりものです。両親
のそのまた両親の、更にもっと前のご先祖
さまから預かった、大切なもの。できるだ
け大事に扱って、ちゃんとお返ししなけれ
ばいけません。またこの生命は、生かされ
ている生命でもあります。だって誰も血液
や心臓をコントロールできませんから。私
たちは皆、自分を超えた何かによって生か
されている。禅ではそれを仏性とか真如、
あるいは本来の自己と呼んだりしますが、
つまりは宇宙の真理です。自分が生かされ
ていると理解できたら、どんな生命のこと
も尊く感じることでしょう。それはね、と
ても自由な状態ですよ」

なるほど。生かされているならば、と自
由で解放された思考がはたらき出すのか。

「第二節ではさらに、人間として生きるこ
とについて、書かれています」

わざわざ人間として、と触れるところが
禅の奥深さだと思いながら聞いた。

「人間は亡くなると茶毘に付されますね。水分は空気中に消え、体は小さな細胞になり、バクテリアが食べに来たり、それが木や土の養分になったりして、生態系をぐるぐる回るわけです。そうして生まれ変わる時にまた人間になれるとしたら、ものすごいことだと思いませんか。もしかしたら鳥や魚や虫だったかもしれないのに。皆、当たり前のように人間でいますけど、人間として生まれたことはすでに得難いことを成し遂げている、と一行目で言っています」

すでに鬼籍に入った人たちのことが頭をよぎる。みんな今はどんな生き物でいるのだろうか。いつの間にかずいぶん多くの人が逝ってしまった。先日他界した伯父は、また人間に生まれてくることが出来るだろうか。

「人間として生まれることだけではありません。さらに仏法に出会えたことも大変稀なことである、と続きます。生まれた環境によっては禅に触れる機会がなかったり、キリスト教やイスラム教が身近な場合もありますからね。お釈迦さまも、盲亀浮木と

いう例え話をしているんですよ。海底にいる目の不自由な亀が、百年ぶりに海面に上がろうとした時、たまたま浮かんでいた一本の流木の穴から偶然にも顔が出せた。そのくらい稀な幸運だ、という例えです」

ほとんどあり得ないだろうが、もしかしたら万に一つはあり得そうな奇跡。いままなからず禅を学びたいと思う私自身を含め、すでに多くの人が最高に善い生まれを実現しているとは。正直すぐには実感できないが、少し嬉しい気持ちになってきた。

亡くなった伯父はキリスト教徒だった。戦後の田舎で身近な教えといえば仏教、または神道だったはずだが、学生時代に出会った教えに何かの光を感じたのだろう。家族で唯一、自らの意思で洗礼を受ける際、伯父の気持ちや尊重した祖父母は一切反対もしな

かったそうだ。その話を聞き、社会貢献活動に半生を捧げたという祖父に敬意を抱いた記憶がある。すると、眼前の栞野老師は「ご先祖さまが積んだ業」について語り始めた。

生命の尊さに気づくか否か 自分らしい人生の分かれ道

「続いて、この幸運には宿善の助けがある、と書いてあります。宿善とはご先祖たちが積み重ねてきた善根、または善徳、つまり徳のことです。禅では、善因善果、悪因悪果と言って、良い原因が良い結果に、悪きことが悪き結果に結びつくと言われてます。道元禪師が生きた鎌倉時代はまだ、仏教や学問自体が庶民にまで広まっておらず、少しづつ体系化され始めた時期です。それもあって、せっかくかけがえのない幸運に恵まれたのだから世のために活かすべきだ、と伝えているんですね。また最後の、「露命を無常の風に任すること勿れ」とは、草木についた露が風で落ちる様を捉えています。身勝手な生き方でただ人生を浪費してはいけない、と論じているんです。一日一日、

一瞬一瞬を大事に生きていくか。そこに気づけるかどうか、大きな分かれ道になるということですよ」

伯父や母は小さい頃から「あの人の子か」と、祖父を知る人たちに親切にしてもらったらしい。現代社会でも、評判が世代を超えることは少なくない。では、悪事をはたらいいた人の子に生まれたら、救いはないのだろうか。「とても良い質問です」と栞野老師がすぐに答えてくれた。

「確かにそのままでは悪因悪果になってしまふ。でもきちんと自分を改め、努力すれば悪因は打ち消すことができます。それは第三節でお話ししましょう」



栞野俊明(ますの・しゅんみょう)
曹洞宗徳山建功寺住職、庭園デザイナー、多摩美術大学名誉教授。著書に『あらゆる悩みが消えていく 運と生きるための禅メンタル』(飛鳥新社)他多数。



▶『修証義』が現代を生きる人たちの心の拠りどころになってもらいたい、といつも平易な言葉で解説してくれる栞野老師。

作る楽しさ できる喜び

静かに佇む古民家は、築百八十年を超える。お庭の大きなスズカケノキにちなんだという「すずかけの家」は、まるで誰かのお宅にお邪魔しているような心地良さを感じる場だ。けれどもここは、日常生活に支援を要する人々が通う、小規模多機能型居宅介護施設。毎日十数程が集う他、訪問や宿泊など全方向のサポートを提供する。自然素材や未利用資源を活かしたコミュニティ「暮らしの手仕事くらして」を主宰する大和まゆみさんは当初、草木染めをした刺繍糸の袋詰めを依頼するため、「すずかけの家」を訪れた。「でも来てみたら利用者の女性たちが上手に編み物をしていました。手仕事も日常的にしているようだったので、もっと一緒にできることがあるかも、と代表の宮内知子さんにご相談しました」「自遊」というコンセプトを掲げ

「て」が広げる身近なつながり

文・やなぎさわまどか 撮影・武藤奈緒美

人の手によって作られたものには、個性と愛らしさというかけがえない魅力が宿っている。さらに、生きる力をそっと後押しするようだ。神奈川県相模原市(旧藤野町)の中山間地で服や小物を手作りする大和まゆみさんは、手仕事から生まれる思いをつなぐため、**今日も介護施設「すずかけの家」を訪れる。**

る「すずかけの家」は日頃から、利用者一人ひとりの声や表情に耳を澄ませ、その人らしさを大切にしたい活動を心がけている。まゆみさんが定期的に訪問するかたちで、編み物や縫い物といった手仕事を行うグループ活動が始まった。「なかには若い時に裁縫を習っていた人も少なくありません。また女性たちが楽しそうに縫い物をしていると、男性たちも『できることある?』と参加してくれるんです。今は草木染めの刺繍糸を糸巻きしてくれる方、丁寧に袋詰めしてくれる方、端切れ布に刺繍をしてくれる方などがあります。それらを『自分の仕事』と認識して取り組む皆さんの姿勢に、手仕事の奥深さを再認識しました。刺繍は、私がバッグやポーチなどに仕上げますが、どれも世界にひとつだけ。最もかわいくするにはどういうデザインがいいか、毎回悩みながらも楽しんでます」

素敵なものができあがり一緒に喜んだのも束の間、少し経つと自



刺繍を進める利用者の女性

利用者の男性に糸巻きを伝える大和まゆみさん(写真右)「私の顔を見ると、手仕事の日だと認識してくれる方もいます。みんなで手仕事をしていると、場の一体感が出てくるようになりました」

分で作ったことを忘れてしまう人もいる。また毎日手仕事をするわけでもないのに、歩みはとてもゆつくりだ。それでも手を動かし時間は確実に積み重なり、小さな成果は周囲の人の心にも届く。「この地域に住むアートディレクターの武笠太郎さんが一緒に考えてくれて、『て』というブランド名とロゴが決まりました。いつか展示会をしたり、ささやかでも利用者さんたちの収入になったり、またそうしたことが皆さんの張り合いになれば、と考えています」

やなぎさわ・まどか

ライター・コピーライター・翻訳マネージメント。食と農をテーマに、社会課題と暮らしの接点を取材する。株式会社Two Doors 代表

「途中で作っているものがわからなくなる方もいますが、それでも手は動くんです。手仕事をする人生の先輩たちに、尊敬を抱いています」



NPO法人自遊の広場 すずかけの家

〒252-0186

神奈川県相模原市緑区牧野1987

042-6889-3145

<https://jiyunohiroba.com>

「て」展示会のお知らせ

●会期 2025年11月1日〜

2026年1月31日まで

●場所・新湯治場 秋山温泉

(山梨県上野原市秋山2210)



出来上がった刺繍はまゆみさんが作品に仕上げている。「今はすずかけの家のスタッフと私で運営しているので、一緒にやってくれる人も増えたらいいな」

変わりゆく街の 新しい 居場所づくり

―地域に根ざした子ども食堂が生み出す、
温かなつながり―

誰もがほっとできる場所を求めて――急速に環境が変化する二子玉川で、子どもや家族、地域の人々をやさしく包み込む「まぜっこ食堂」。この温かな子ども食堂の主催者・温井克子さんに、日頃の活動についてお話を聞きました。

「困っている人を支えたいという思い」

「どうしてこの活動を始めたのか、ときどき考えます」と、二子玉川で「まぜっこ食堂」を運営する温井さんは話します。福祉への強い思いから、約10年前に子ども食堂を始めました。その根底には、自身の子ども時代の体験や「困っている人に手を差し伸べなさい」と教えてくれた母の言葉

があります。「私は世話好きな性格で、困っている方を見過ごせません。多くの方の支えがあってこそ、この活動を続けられています」と温井さんは語ります。



◀子ども食堂主宰・温井克子さん

ですよ」と温井さんは語ります。「今は住民層も移り変わりましたが、昔からの住民も多く、助け合いの心は今も息づいています」

子ども食堂を始める直接のきっかけとなったのは、町会の集まりに参加したことでした。そこで出会った3人の女性と意気投合し、協力して立ち上げる運びとなりました。当時、世田谷区内で子ども食堂はまだ4軒しかなく、温井さんたちの取り組みは先駆的なものでした。その後、区内の子ども食堂は80軒にまで増え、地域全体の支え合いが広がっています。

「地域に支えられる運営のかたち」

子ども食堂の運営は、地域の方々からの温かいご寄付によって支えられています。たとえば、地元の大学の元教授が家屋の一角を間借りし、毎月利用料を納めてくださることで、家賃の支払いに充てることができるようになりました。そのおかげで、電気代や水道代もまかなわれています。また、スタッフのみなさんはボランティアとして力を貸してくださっています。

「本当に、地域のみなさんのご協力があつてこそ続けてこれました。私ひとりの力では到底できません」と温井さん。

「食事を越えた居場所としての役割」

子ども食堂は、単に食事を提供する場所ではなく、お母さんたちの負担を和らげ、地域のつながりを深める大切な役割も担っています。

「この地域は家賃が高く、共働きでなければ生活

「懐かしさと温かさに包まれた 古民家の子ども食堂」

温井さんの子ども食堂は、築年数の経った一軒家を活用しています。

「壁や床には長い年月の味わいを感じられ、ときどき傾いているのではと思うこともあります、この家こそが、みなさんが安心して集まることのできる場所なのです」

昔ながらの造りが残る家には、広い土間があり、大きなテーブルを囲んでみんなで食事を楽しむことができます。

「最初はこの場所で始めるとは想像もしていませんでしたが、思いのほかみなさんに気に入っていただけているようです。修繕を重ねながら大切に使っていますが、この場所には数えきれない思い出が詰まっています」と温井さん。



「変化する二子玉川で求められる 新たな居場所」

温井さんが子ども食堂を開設した二子玉川は、東京都世田谷区にあり、近年は再開発が進み、駅周辺には大型の商業施設が立ち並ぶ地域へと変化しています。新しい住民が増える一方、昔ながらの昭和の雰囲気も一部に残る、どこか懐かしさも感じられる街です。

「二子玉川は、かつてはもっと庶民的な街だったん

が難しいというご家庭も多いんです。でも、仕事が長引くと、どうしてもお子さんの夕食が十分に用意できないこともあります。そうしたときに『ここがあつて助かります』と多くの方から言っていたんです」

さらに、子どもたち同士や地域の人々が気軽に関わることができる場としても機能しています。

「ここに来ることで子どもたちが新しい友達をつくったり、お母さん同士が情報交換をしたりするきっかけになっています。今は、ただご飯を食べるだけでなく、誰かと話すことができる場所であることがとても大切だと感じています。最近では、大人の方にも『ここへ来ると安心する』と言っていたことが増えました。そうしたつながりが生まれることが、何より嬉しいですね」。

子ども食堂は、子どもたちのお腹を満たすだけでなく、二子玉川エリアにおいて、共働き家庭が増える中で新たな役割も求められるようになっていきます。子どもたちが孤立しないよう見守るのはもちろん、仕事でお疲れのお母さんたちの心も癒やす、そんな大切な居場所となっています。

「時代とともに、子ども食堂の存在意義も変わっていくのは自然なことだと思います。みなさんが笑顔で、安心して過ごせる場所を提供できれば、それが一番の喜びです」

古民家風の温かい雰囲気の中、温井さんの子ども食堂は多様な価値観や新しい家族層に対応し、地域の憩いの場となっています。



ヒトの子育ての特徴

生物としてのヒトの子育てはどのようなものか。
霊長類の一種であるヒトの特徴は、他の霊長類と比較することでより明確になる。
ヒトでは母親単独での子育てが困難であることが浮かび上がってくる。

文 齋藤慈子

ヒ

トをよりよく理解するには、他種との比較が役に立つ。ヒトは哺乳類の中のサル仲間、霊長類である。哺乳類同様、霊長類も多くの種で母親が主に育児を担い、父親や他個体の乳児への関わりは限定的である。他の哺乳類と比べた時の霊長類の特徴として、群れで生活し、長寿で子ども期が長いことが挙げられる。霊長類は、長い子ども期の中で、社会的な行動を学んでいく。愛着理論の背景として有名なハローウのアカゲザルの実験があるが、出生直後のアカゲザルの子どもを母親から引き離し、社会的に隔離して育てると、社会的な行動を身につけることができないが、母親と育っても群れの仲間と接触しなければ、遊び行動など社会的な行動が正常には発達しないという。霊長類においては、母親が主に子育てを行うとしても、社会の中で育つことが大切だといえる。

霊長類でも種によつては、母親以外の個体が子育てに積極的に参加する。このような子育ての仕方を、共同繁殖と呼ぶ。代表的な例として、中南米に住む小型のサル、マーモセットが挙げられる。このサルでは、多くの場合双子が生まれ、メスは出生後すぐに次の子を妊娠することも多く、負担が大きいため、父親や兄弟も子育てを担う。子は生後直後から父親や兄弟に背負われて運ばれる。母親のみが子育てをするサルでは、愛着は基本的に母親にしか形成されないが、マーモセットでは、母親だけでなく、父親や兄弟にも愛着が形成され、しかもその様相は相手（養育個体）のふるまいによつて変わる。愛着対象は一人ではなく、複数の相手にそれぞれ愛着が形成されるのである。

さて、ヒトはどのような特徴を持ち、どのような子育てをする種だろうか。群れ（社会）の中で生活するというのは他の霊長類と同じだが、そ

の規模はより大きく、より長寿、より子ども期が長い（チンパンジーではそれぞれ約50年、10年）。また、他の霊長類は生まれた時、自力で養育個体にしがみつくことができる程度に発達しているが、ヒトは未熟な状態で生まれる。二足歩行で骨盤の形が変わって産道が狭くなり、さらに成体の脳も大きくなったことから、十分発達した状態で出産すると子どもの頭が産道につかえてしまうため、頭が小さい未熟なうちに産むようになったと考えられている。

未熟に生まれることもあり、ヒトの子どもは他の霊長類の乳児に比べ、育てるのが大変である。他の霊長類の乳児は自分で乳首に吸いつくが、ヒト乳児はおなかが減ると泣き、授乳される必要がある。他の霊長類の乳児は眠くなると

勝手に寝るが、ヒト乳児は寝かしつけが必要である。そして、他の霊長類の子どもは、離乳したら自分で生きていくことができるが、ヒトの場合は離乳しても食事を提供されなければ生きていけず、自分で自分の食べる分をまかなえるようになるのは20歳前後とされる。

また、他の霊長類では、子どもが離乳し、手を離れてか

ら次の子を産むが、ヒトは子どもを短い間隔で産む。チンパンジーの出産間隔は5.5年だが、ヒトの平均的な出産間隔は4年弱とされる。つまり、バースコントロールがされなければ、手のかかる複数の子どもを同時に育てることになる。このような大変な子育てを、他の多くの哺乳類のように、母親単独で行うのは困難である。それゆえヒトも共同繁殖をする種であるとされる。

実際、ヒトの母親には他者の助けが必要である。周囲からのサポートが産後うつ、母親の子どもや育児に対する感情に影響を与えているという報告や、育児に専念している無職の母親のほうが、他者の手を借りて子育てをしている有職の母親より育児ストレスが高いという報告がある。祖父母のサポートが多くの場合重要であることもよく知られているであろう。次回は、ヒトは共同繁殖種であるという前提のもと、現代において、親子に他者がかかわることの意義について考えてみたい。



さいとう・あつこ

上智大学総合人間科学部心理学科、准教授。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。養育行動、養育欲求、親子関係、伴侶動物とヒトの関係などをキーワードに、人間の行動・発達を、進化心理学的視点から考える。



知足-----	01
曹洞宗管長 大本山永平寺貫首 南澤道人	
人々悉道器-----	02
大本山總持寺 貫首 石附周行	
特集	
これからの仏教と大学 波から降りず、変化し続ける-----	03
古瀬正也	
毎日書道・作品審査評-----	10
松山妍流	
募集俳句選・年間大賞-----	12
尾崎竹詩	
連載	
教えて!『修証義』道元禅師の道標-----	13
やなぎさわまどか	
「て」が広げる身近なつながり-----	17
やなぎさわまどか	
変わりゆく街の新しい居場所づくり-----	19
塚越雅之	
連載	
動物との比較から学ぶ、子育ての処方箋——03 ヒトの子育ての特徴-----	21
齋藤慈子	

道元 実践の哲学

身心論から読み解く『正法眼蔵』

著者：末木 文美士



定価：2,200 円 (本体 2,000 円+税)
KADOKAWA / 2025年 / 四六判 / 300頁

KADOKAWA WEBより転載：
<https://x.gd/YA01d>

窮屈な世界から抜け出すために、道元が到達した修行の哲学。
日本を代表する思想書の一つ、道元『正法眼蔵』。仏道修行に重きを置く道元の、実践に即した哲学が特に表れているのが「身心学道」の巻である。私たちの身体と心を、少しでも仏に近づけるにはどうしたら良いか。欲望としがらみが絡み合い、既成観念にとらわれた窮屈な世界を抜け出すには、どうするべきなのか。道元が考え抜いた、ときに常識を覆す思想を、日本仏教研究の泰斗が、やさしい講義形式で一つずつ紐解いていく。

書店にてお求めください

表紙画「元旦のダルマ朝日」 平川恒太

今回は、高知県で11月から3月の時期に運が良いと見られるダルマ朝日を描きました。海面の海水温と大気の温度差が大きい秋から冬の時期の晴れた日に見られる蜃気楼の一種です。太陽が水平線から顔を出した後、その鏡像が本体とつながって見えることが特徴です。今年は表紙画で自然の中で親しまれてる仏教を何度か描きましたがダルマ朝日もまた日本人の仏教への思いを感じます。